佐田三季
mikki sada
麻生ミツ晃
illustration
mitsuaki asou
「あの日、校舎の階段で」番外編
Ivy
© 心交社

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

風呂から出て、リビングに入ると、ローソファーに座っていた遠藤圭祐（えんどうけいすけ）の肩がびくりと震え、ぎくしゃくと顔をあげた。

男の手のなかに、自分の買い換えたばかりの青い携帯があるのを見て、笠井亨（かさいとおる）はじりっと腹の底が熱くなるのを感じた。

またやりやがったか、このクソバカ。

眦（まなじり）を吊りあげて、遠藤を睨む。

「なにやってる」

「あっ……ちがうから」

先日、携帯のメールを勝手に見られた。とりたてて、隠すことはなにもないけれど、疑われているようで、腹立たしい。

だいたい断りもなく、ひとのメールを読むなど、言語道断。プライバシーをなんだと思っている。それに、そのあさましい根性を許せるだろうか、いや、許せるわけがない。

「また勝手に俺のメールを見たのか」

「ち、ちがう。見てない」

遠藤がうろたえたような、引きつった笑みを見せる。だいたいそんな笑みのときは、図星なのだ。笠井は目を据わらせて「じゃあ、なんでもっているんだ」と唸った。

ローソファーから立ちあがると、遠藤は青い携帯を笠井に突きだした。

「ストラップを替えたんだ。せっかく携帯を新しくしたんだし。だから」

いままでペットボトルのお茶にくっついていた、オマケのストラップをつけていた。それで用が足りていたから、とくに新しくしようとは思わなかった。

携帯を手渡され、拍子抜けした顔で笠井は新しいストラップを見た。

編みこんだ黒い皮紐のさきに、ステンレスだろうか、銀色の平たい輪がついている。この輪には、蔦のモチーフとアルファベットが細かく彫金されていた。

アルファベットはメーカー名なのだろうか、よくわからなかった。英語でもフランス語でもない。ひょっとしたらイタリア語、もしくはスペイン語なのかもしれない。

ストラップは少し重いような気がしたけれど、デザインはとてもシンプルなもので、気に入った。

笠井は目元をやわらかくして、ひらりと笑った。

「疑って悪かったな。……ありがとう、大事にする」

礼を言うと、遠藤は「う、うん」と目線をうろうろさせた。まっすぐに笠井を見ない。ストラップはさておき、メールを見たのにちがいなかった。

パソコンを立ちあげ、大手通販サイトで本とCDを選んでいると、インターネット電話サービスのスカイプの呼びだし音が鳴った。

東北のローカルテレビ局でアナウンサーをやっている、及川直志（おいかわなおし）からの呼びだしだった。イヤホンマイクをつけ、通話ボタンをクリックする。すぐに弾んだ声が流れた。

『亨ちゃんっ！　リリィパイプ、いいよぅ。水槽のなかで水流がさー、もう

すごく――』

その弾んだ声がふつりと途絶えた。モニタのなか、及川の顔がみるみるこわばっていく。

「及川？　どうした」

首をかしげると、背後から遠藤の腕が伸びてきて、それが自分の首に絡んだ。ぎょっとする。笠井の肩に遠藤の顎が乗った。男の唇が笠井の頬にあたる。そして、頬をべろりと舐められた。

「おい、やめろっ」

笠井は慌てて遠藤の頭を押しのけようとしたが、絡みつく腕の力がさらに強くなる。

まだ及川には遠藤と自分が付きあいはじめたことを言っていなかった。なのに、遠藤はお構いなしだ。及川と話すときは出てくるなとちゃんと言ってあったのに。

遠藤が底意地の悪そうな笑みを浮かべた。笠井の口元のイヤホンマイクに向かって大きな声で言う。

「笠井は俺のだ。わかったか」

及川の頬がひくりと大きく痙攣（けいれん）した。そして口が開く。

『いっ…いやだあああああっ！』

イヤホンから及川の絶叫が聞こえ、鼓膜に受けたその衝撃に、笠井はびくりと震えた。絶叫の狭間に『オイさん、どうした？』という慌てたような男の声がする。

ぽよんと音がして、スカイプが切られた。

しばらく固まっていた笠井は我に返ると、遠藤を睨んだ。

「及川には黙ってろって、言っただろうが！」

遠藤は唇を歪ませて笑った。

「どうせバレる。なら、いまバラしてもいいだろ」

笠井は恋人の歪んだ笑顔を見て、呆れたように口を開いた。

「おまえなあ……。及川がそんなに嫌いなのか」

「ずっと前からおまえに色目使ってただろ、あいつ。むかつくんだよ」

「はぁ？　なに言ってんだ」

遠藤は「フン」と鼻で笑って、低く続けた。
「……虫の駆除は徹底してやらないと」
背後からぎゅっと遠藤が抱きしめてくる。体重をかけてくるので肩が重い。また男の低いぼそりとした呟きが笠井の耳に届いた。
「だれにもやるつもりはないんだ」
笠井は小さく溜め息をついた。最近、この男がさらに重く――――。

複雑怪奇な魑魅魍魎が跋扈なのよ、と目の下にくまを作った同僚の丸山佐和子が、笠井の隣席でそんなことを呟きだす。
最近、ずっと残業が続いて、家に帰るのが終電近かったな、と笠井は振り返り、虚ろな目をした丸山と後輩の三河雅紀も誘って、いっしょに昼飯に行くことにした。
「なにがいいですか、丸山さんが食べたいのでいいですよ」

笠井が水を向けると、丸山の疲れた表情が一変した。
「オムライス！　オムライスが食べたい」
会社近くの老舗洋食屋の名を挙げ、丸山はにこにこと笑った。
店に入り、各自の注文を済ませると、三河がじっと丸山の顔を見つめた。
「ひどい顔してますよ、丸山さん」
「……ブスってこと？」
笠井は笑って、口を開いた。
「いや、目の下のくまがってことですよ。だいじょうぶですか、式は今週なんでしょう？」
丸山は今週末に親族だけの結婚式をあげる。相手は年下のフレンチのシェフだ。そんな彼女はテーブルの上でおしぼりをぐっと握り締めた。
「明日はぜったい定時であがるからっ」
「……どうぞお幸せにー」
三河が丸山を見やって溜め息をついて、笑う。その様子に、丸山が片眉をあげた。

「なによう、三河君だって彼女いたでしょ」
「どうなんですかね、わかんなくなってきたところです」
沈んだ調子で三河がぼやくのに、丸山は「あっ、そうなの」とそれをさらりと流して笠井を見やった。
「そういえば、笠井君の彼女ってどんなひと？　結婚は。考えてるの？」
聞かれて、笠井はぐっと詰まった。だいたい相手は女でない。どんなって……ひとのメールを隠れてチェックするようなクソバカで、やることなすこと変質者だ。
笠井は目を逸らしながら、ぼそぼそと答えた。
「高校の同級生で、結婚とかまだそこまでは……」
「同級生かぁ。いいわねえ、そういうのも。で、どんなひと？」
丸山と三河の目が笠井に集中する。笠井は顔を背けた。斜め下の床を見つめる。
「ど、どうだっていいじゃないですか、僕のことなんか」
店員が、オムライスや日替わり定食を運んでくる。笠井はそれを、ほっと

して見つめた。
食べ終わり、コーヒーを飲んでいると、笠井の携帯が鳴った。メールを受信したのだ。サブディスプレイに遠藤の名前が出る。メールを開くと、『昼飯なに食べた？　夕飯はどうする？』という他愛（たわい）もない内容だった。
「かわいい彼女よね。一日に何度もメールしてきて」
丸山の言葉に、笠井は引きつるような笑みを浮かべた。
どこが、かわいいのか。バカみたくメールしてくるし、面倒だから一本も返信しないでいると、陰険に責めてくるようなやつだ。……週末に、ベッドの上で。
三河がちらりと笠井の携帯を見てきた。
「あれ、ストラップ、替えたんですか。かっこいいじゃないですか、それ」
「あっ、本当。笠井君、ちょっと見せて」
丸山に携帯を渡す。丸山はその青い携帯をもち、目の前にストラップをぶらさげた。ためつすがめつ、厚みのある楕円のチャームを眺めると、丸山はにやりと笑った。

「これさあ、自分で買ったんじゃないでしょ？」
「……ええ、まあ。もらいものです」
「結婚とかまだ考えてない彼女からよね？」
「そう、ですけど」
丸山はマスカラに縁取られた目を見開いた。
「やだ。彼女がかわいそうじゃないの。すごく本気なんじゃない。……これ、高いわよ～？」
「高いって。せいぜい、いっても二千円くらいでしょ、こんなの」
ストラップはなんの変哲もない皮で、チャームはステンレスだ。
「そんなわけないでしょ。プラチナだもの」
丸山の言葉に、笠井はひくりと唇を引きつらせた。とりあえず、コーヒーをひと口飲んで自分の心臓を落ち着かせる。
「……ステンレスでしょう、それ」
「輪の内側、よく見てごらんなさい。Ｐｔって刻まれてるから」
丸山から携帯を受け取って、チャームの内側をよく見ると、たしかに小さな四角のなか、Ｐｔというアルファベットが刻まれていた。三河が「ふぇぇ」と変な声をだすと、首をかしげた。
「いくらぐらいなんですかね。そのぐらいのプラチナって」
「あたしのマリッジリングで二十万くらい。で、これはもうちょっと目方があるから、どうかな。……それで、『Ｋｔｏ Ｔ』ってあったから彼女のイニシャルはＫね、うふっ」
たしかに裏側には『Ｋｔｏ Ｔ』と刻まれていた。圭祐のＫと亨のＴ……。携帯をテーブルの上に置く。笠井はじっとうなだれた。
いったい、なんのつもりだ、あの野郎……。
丸山がまた笠井の携帯を手に取ると、楽しげに続けた。
「これさあ、京都の宝飾メーカーのオーダーメイドだと思う。前に結婚情報誌の特集で見たデザインとそっくりだもの。でね、この刻まれた言葉なんだけど、ラテン語なのよ」
「……へ、へえ。ラテン語なんですか、よくご存知で」
うろたえながら、笠井はおしぼりで汗ばんだ手を拭いた。もうなにも聞き

たくない。いっそ、どこかに消えてしまいたい気持ちがする。
笠井はコーヒーカップをもった。丸山のその目が、いたずらっぽく猫のように光る。そして、また彼女の口が開いた。
「結婚式のペーパーアイテムを自分で作ったんだけど、それでこの言葉を使ったのよね。amorem perpetuum tibi ってね、『永遠の愛をあなたに』という意味なのよ」
笠井は顔を引きつらせた。
でも、内心ほっとする。まだコーヒーを啜ってなかったからだ。これで啜っていたら、ぜったいに噴きだしていただろう。
心を落ちつけるため、笠井はコーヒーカップに口をつけた。また、丸山の声がした。
「でね、ここに刻まれたアイビーの花言葉ってね、『死んでも離れない』というの」
コーヒーが気管に入る。
「ぐふっ」

「うっわっ、笠井さん、きったねー」
咳きこみながら、そんなことを言う三河を涙目で睨んだ。
思いきり気管に入ってしまったため、げはげはと咽(む)せながら口元を押さえて、よろけるようにして洗面所に行く。
その短い道のりが遠い。激しく咳きこみながらなので、ほかの客の視線が痛い。
……ああ、奇異の目だ。
洗面所で思いきり、咳きこんだ。洗面台に手をついて、生理的な涙を流しながら、遠藤を呪った。
あの野郎、俺を殺す気か……。
『死がふたりを別つまで』というフレーズならよく聞くけれど、『死んでも離れない』というのは、どうだろう。バカは死んでも治らないというけれど、そういうことか。
あいつのことだ、花言葉なんかきっと知らない。たまたまだろう。でも、なんてあいつに似合いの植物だろう。

笠井はそこまで考えて、咳きこみながら笑った。苦しいのに、おかしくてたまらない。横隔膜といっしょに腹筋まで痛くなった。

「だいじょうぶですか、笠井さん」

三河が洗面所にやってきた。笠井は三河に向かって、咳きこみながら頷いた。

俺はだいじょうぶ。だいじょうぶじゃなくて、おかしいのはあいつ――。

残業をして部屋に帰ると、十二時を軽く過ぎていた。先に帰っていた遠藤のくつろぐ姿を尻目にビジネスバッグを床に置き、いつものように財布、携帯と腕時計をローテーブルに置いてから、スーツを脱ぐ。ボクサーパンツ一枚になって、遠藤の顔もわざと見ずにさっさとバスルームに向かう。

とっとシャワーを浴びて眠らないといけない。連日の残業だ。少しでも

疲れを取っておかないと明日がつらくなってしまう。

シャワーを浴び終わり、さきに寝るわ、と遠藤に言い置いて笠井はベッドにもぐりこんだ。すると、すぐに切羽詰った顔の遠藤がそばにやってきた。

「笠井。……携帯のストラップがないんだけど、どうしたの」

ストラップはプラチナだと聞いてから、気が気でなかった。会社に戻ってすぐにはずし、ビジネスバッグに突っこんだ。笠井は溜め息をつき、遠藤を見やった。

「あれ、高いんだろ。そんなの携帯なんかにつけてられるか。紐がぶち切れたら終わりだっての」

「それでもいいよ。とにかくずっともっていてほしいんだよ。……笠井は指輪みたいなアクセサリーは好きじゃないだろう、だから――」

「なくしたくないって言ってんだろ」

遠藤の言葉を強い口調で遮った笠井はすっぽりと頭からタオルケットに包まって、男に背を向ける。いま、自分の顔を遠藤に見られたくなかった。

「週末にチェーン、買いに行く。それで首にぶらさげとけばいいだろっ！

チェーンなら、なくしようがないし」

照れ隠しに放り投げるように言い放つ。

正直、アクセサリー類は嫌いだ。指輪は拘束の証のようで不愉快だ。ネックレスだって首輪のように思えて頭にくる。だけど、この男がそんなことで安心するなら、よしとする。

遠藤の気配が近づいた。ぎしり、とダブルベッドが軋み、寄り添ってくる。

「……チェーンなら、俺が買う」

蔦のように絡みついて離れない恋人が、長い腕でタオルケットごと笠井を抱きしめてきた。

了